研究プロジェクトの概要

１． 発足の経緯と背景

神田外語大学における留学生受け入れは、2000 年 9 月の留学生別科開講に始まる。その半年後の 4 月からは学部でも留学生が学ぶようになり、今日に至るまで在籍留学生数は増加の一途を辿る。留学生受け入れの概要については別章で詳述するが、ここでは「留学生支援制度」の研究プロジェクトと実際の支援制度の軌跡を簡単に振り返り、本プロジェクトの背景を説明したい。

留学生受け入れが国の目標である 10 万人を超えてさらに増え続けている現在、留学生支援についての研究も少なからず行われてきた。そして、受け入れた留学生に対して言葉の問題を含めた学習面だけでなく、精神面、生活面での支援が必要であることは、最早自明のことになりつつある。本学でも留学生を受け入れるようになった直後から彼らに対しどのような支援が可能であるのかという模索を続けている。具体的な取り組みとして、学部での留学生受け入れが始まった 2001 年 4 月からこの方面での研究チームを組み、異文化コミュニケーション研究所の助成金を受けて『留学生支援システム構築のための International Encounter Group の可能性』(研究代表：サウクエン・ファン、共同研究者：堀内みね子、徳永あかね）という 3 年間のプロジェクトを発足させた。これは今回の『外語大における多文化共生』の前身でもある。ここでは支援策の一つとして心理学者 C.R.Rogers のベーシック・エンカウンター・グループ（Basic Encounter Group）の手法を用いたインターナショナル・エンカウンター・グループ（International Encounter Group）を実施し、その実施方法、経緯、支援策としての可能性について分析を行った。この間､一つの研究チームとして留学生支援について学ぶ一方で数々の意見交換をしたが、この経験が学部、別科を越えた全学的な支援協力体制の基礎を築いて来たと言っても過言ではなかろう。実際にも研究を行う傍ら、現場においても留学生の大学生活を支援する方策が次々に試みられていった。

こうした支援システムは常により現状に即した形で運営されるような見直しが必要であるが、それは単に表面的な問題を場当たり的に解決していくことではなく、現状を客観的な視点で分析し、長期的な視野に立つことが必要である。そこで外語大という環境でどのような留学生支援システムが可能であるのかを視野に入れて現行の各支援システムの理論的な検証を試みるため、新たなメンバーを加え、前回と同様、異文化コミュニケーション研究所の助成金を受けて 1 年間のプロジェクトが発足した。

また、これと同時期、本学の留学生現場においてもプロジェクトのメンバーを中心に留学生にかかわる教員、事務スタッフにより構成された「留学生支援会議」が発足した。別科、学部の枠を越え、それまで学部、別科それぞれ部分的には連携しながらも、それぞれの担当者が中心となって運営されてきたチューター、バディ、学習相談員等の各々の支援策について定期的に情報や意見交換を行い包括的に運営していこうという試みである。この留学生支援システムの運営に本プロジェクトで行った研究の成果が反映され、システムがより良いものとなっていくことが期待される。

２． 研究組織

研究代表者

サウクエン・ファン（神田外語大学・国際コミュニケーション学科・助教授
留学生別科・別科長）

研究分担者

遠山千佳（神田外語大学・留学生別科・講師）
徳永あかね（神田外語大学・留学生別科・講師）
堀内みね子（神田外語大学・国際コミュニケーション学科・講師）
村上律子（神田外語大学・留学生別科・講師）

研究経費

2004 年 4 月～2005 年 3 月　　500,000　円（予算）

３． 研究会・会議等実施記録

2004 年 6 月 10 日	全体会議
7 月 22 日	第１回　研究会
9 月 22 日	第２回　研究会
9 月 29 日	第３回　研究会（外部講師招聘） 加賀美常美代先生（お茶の水女子大学留学生センター助教授）講義
10 月 6 日	第４回　研究会
2005 年 1 月 21 日	全体会議
3 月 16 日	全体会議

４． 「外語大における多文化共生」について

４．１　「外語大」という環境について

どのようなシステムを構築する場合にも、ニーズの分析と同様に、そのシステムが運営される環境を無視することは出来ない。システムが効果的、且つ、健康的に運用されるには、環境にある使用可能なリソースを把握することが大切である。今回のような留学生支援システムを構築する場合、大学の建物や設備と言った物的リソースや教職員や学生と言った人的リソースが考えられる。これに加え、どこからどのぐらい予算の捻出が可能かも、各大学の方針や規模によって異なるであろう。本研究では「外語大」という環境を最大限に活かし、その特徴を取り入れた支援の現状の検証を試みる。

本校は関東地区の私立では唯一の外語大学である。英米語学科、韓国語学科、中国語学科、スペイン語学科に加え、インドネシア語・タイ語・ベトナム語・ポルトガル語の４カ国語と英語と同時に専攻語として学習できる国際言語文化学科、言語だけでなくコミュニケーション能力とコンピュータ・リテラシーを重視する国際コミュニケーション学科等を有する。また、選択外国語としてはフランス語、イタリア語、アラビア語、ロシア語、ドイツ語などが開講され、どの学科の学生も履修することができる。母国を離れ心細い思いで日本に留学してきた留学生が母語を少しでも理解できる学生に会うことは何よりも大きな安心を与えるであろう。また、慣れない日本語を一生懸命に話す留学生を前にして、同様の経験を日々している外語大で学ぶ学生たちは、他の専攻のものよりも相手を理解できる立場にあると言えよう。外語大の環境を利用し、どのような留学生支援システムが有効であるのか、本報告書に収められた各論で分析を試みる。

４．２　多文化共生とは

「共生」という語は、一般的にも使用されるもので、「共棲」という字があてられることもある。辞書等では「異種類の生物が同じ所にすみ、互いに利害を共にしている生活様式」（林 1985『現代国語例解辞典』小学館）と説明されている。最近では新聞等でも外国人との共生というように「異種のもの」と同じ社会に共存していく意味で使われることが多くなってきた。これは、かつての外国人を日本人へ同化させる施策と対照的なものという意味合いも含んでいると考える。いずれにしても、「共生」にはお互いに異なるものがそこに存在することがその前提としてあると言えよう。外語大における「共生」を考えるとき、異なる存在として「受け入れ学生[1]」と「留学生」というカテゴリー化が一番大別しやすいグループである。本研究でもその大きなカテゴリー分けに準じつつ「多文化」の言葉には個々の学生が持つ文化の違いを含んでいる。個々のいくつもの異なるもの同士がそこに存在し、互いを尊重し、協力しあいながら社会を形成していくものを指すこともでき、それこそが「多文化共生」であると考える。

前項で紹介したように外語大には様々な言語を学ぶ学生がおり、逆に様々な言語を話す学生を 15 カ国（2004 年 12 月現在）から受け入れている。互いが互いの「学ぶ」立場にたち、出来る範囲での支援を行うことは、支援する側にとってもまた得るところが大きいであろう。言語での支援を与える側が、別の支援をその相手から受け取る、そのようにしてお互いが受益者として「共生」していける環境を作るには、どこへ目指していけば良いのか、今回の個々の論文から示唆されるものと考える。

---

[1]「留学生」と言う呼称に対照して「日本人学生」という呼称が用いられることがあるが、本学の学生は日本語を母語としながらも国籍は必ずしも日本とは限らないため、ここでは「受け入れ学生」または「一般学生」の名称を用いる。